名月――八月の詞

一海知義

さて、仲秋の名月をうたった漢詩の中で、日本人に最もよく知られて来たのは、白楽天の次の句だろう。

三五夜中　新月の色
二千里外　故人の心

当時詩人は、みやこ長安にいた。そして左遷されて湖北省の江陵にいた親友元稹に思いをはせて、この句を作る。詩題を「八月十五日夜、禁中に独り直し、月に対して元九を憶う」という。

この句はわが国の『源氏物語』須磨の巻にも引かれている。

月いとはなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりとおぼし出でて、（みやこの）殿上の御遊び恋しく、所々ながめたまふらむかしと思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心。」と誦したまへる、例の、涙もとどめられず。

（月が本当に明るく美しく輝いて出てきたので、〈光源氏は〉今夜は十五夜であったよとお思い出しになって、宮中殿上の間での詩歌管弦の宴が恋しく思われて、今頃はみやこのあの方この方が物思いにふけっておいでであろうよと想像なさるにつけても、月の顔ばかりをおのずと見つめ続けていらっしゃる。〈光源氏〉「二千里外故人心。」と声に出して吟じられると、例によって涙も抑えられないでいる。）

かつて私は『源氏』のこの一節について、次のようにのべたことがある。

「名月をながめて、白楽天が想うのは、親友元稹のことであり、源氏が想うのは、都にのこして来た女たちのことである。それは、主として男性の文学である『源氏』とのちがいを示している、といえなくもない。なお、白詩のこの句は、『源氏』成立後数年、藤原公任の『和漢朗詠集』（一〇一三年成立）に採られて、さらにひろく知られるようになった。」

ところで句中にいう「二千里」とは、どれほどの距離をさすのか。唐代の一里は約五六〇メートルだとされ、二千里は一一〇〇キロほどになる。地図上で測ってみると、たしかにこれを日本に当てはめれば、ほぼ東京・下関間か。

かく一千キロも離れた土地にいる二人が、同時に眺めることができる。それが天上の月である。このことが遠く離れた二人の心を、一つに結びつける。

だが、親友元稹もまた同じ時間に、同じこの月を眺めているのだろうか。

さきの二句は、全八句中の第三、四句だが、詩は末尾二句に至って、次のようにうたう。

猶お恐る　清光　同じくは見ざるを
江陵は卑湿にして　秋陰足る

元稹君、きみがいま居る江陵は、土地が卑くて湿気の多い所だと聞いている。そして秋になっても、陰りがちな日がつづくということだ。

遠く離れ離れになった二人が、せめて今宵はこの清らかな光を、空を仰いで共に眺めたいのだが、……。それもかなわぬ願いなのだろうか。